

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 中国東北地方の社会経済の変動と伝統的価値観の復興：現地調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 冬月, 律 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002302">https://doi.org/10.57529/00002302</a>

## 【現地調査報告】

中国東北地方の社会経済の変動と  
伝統的価値観の復興

冬 月 律

## はじめに

本研究報告は、平成22年9月に本学の研究開発推進センター「共存学」研究プロジェクト（研究代表者：古沢広祐教授）の一環としての中国東北地方における調査研究の報告を目的としている<sup>1)</sup>。

報告に入る前に、本調査研究の背景について簡単にふれておく。

中国のGDP（国内総生産）は、2010年には日本と肩を並べ、2020年には米国に迫る勢いである。しかし、中国の高度経済成長は、国民に一律に恩恵をもたらしているわけではなく、極めて大きな格差と不平等をもたらすようになってきた。都市と農村、沿海部と内陸、外資系企業と民族系企業、漢族と少数民族、都市の内部での格差などさまざまな局面で大きな所得格差が生じている。

こうした格差は、国民の不満と結び付きやすく、年間数万件といわれる抗議行動が発生している。また、格差問題は少数民族問題や政府が禁止している国定の宗教とも結びつきやすく、中国政府は神経をとがらせている。格差問題は、中国社会の安定性と現政権の正統性のうえからも最重要課題となっている。

中国政府は従来、格差問題に対する政策として「西部大開発」など積極的に地方経済振興政策を実施してきた。しかし、皮肉なことに、これらの内陸都市が発展することによって、その周辺のさらに遅れた地域の住民が自らの遅れを認識するようになり、不平等感はいっこうに収まる気配がない。いわ

ば格差感の無限の連鎖に陥っているのである。

このように格差問題は、経済政策だけでは解決できない根の深い民衆の心性に関わるものであることが明らかになってきた。格差に起因する社会的不安や金銭万能主義の風潮、汚職や腐敗に対応するため、近年、中国政府はバランスのとれた発展に配慮するようになってきた。現政権の「和諧社会」もこのようなスローガンである。

近年、中国政府が民心の安定策として打ち出しているのが、寺院や旧跡の復興である。中国では文化大革命期においては宗教活動が禁止されていたが、改革開放以降は見直しが行われ<sup>2)</sup>、「宗教信仰の自由と尊重」を建前とするようになった。こうした政策的転換を背景に、2000年以降の中国において宗教活動の正常化と宗教研究活動の活発化および宗教施設の復建が見られるようになった。

宗教施設の復建は、政府の宗教政策の重要な一環として政府資金による支援の下で全国的に進められている。とくに歴史的な名所、少数民族集中居住地区などにおいては、宗教施設は歴史文化施設、環境保護、観光地など社会生活に有益なインフラとして重視されている。宗教政策の見直しとそれに伴う宗教施設の復建は、地域経済の活性化に貢献しているという側面もある。(註「國學院大學特定課題研究」より)

今回の調査研究は上記にも触れたように、近年の経済発展に伴う中国東北地方の様子を ①東北三省の経済発展の様子を捉える、②生物多様性との関連性を探る、③伝統文化・宗教施設復興を確かめる、の3点に着眼し、15日の行程で行われた。

全体的な内容を通して、できるだけ現地の様相を紹介しつつ、筆者の考察も所々付け加えながら経済発展と伝統文化の復興に関わる点を中心に関連写真を交えながら報告していきたい。なお、本文中の添付写真は筆者撮影によるものである。

## 1. 調査地概観<sup>3)</sup>

調査報告に入る前に、今回調査で訪れた東北三省について簡単に概観する。

### (1) 吉林省

#### ①位置と地勢

省都は長春。東北三省の真ん中に位置し、西部は朝鮮・ロシアと国境を接している。地勢は東南が高く、西北が低い。中心部の大黒山を境界線として東部は長白山地、西部は松遼平原に大きく分れる。朝鮮との国境沿いにそびえる長白山の頂上には天池と呼ばれる火口湖があり、湖面海拔2150m、水深は370mに達し、省内を横断する松花江の源流となっている。また西部は泡・甸と呼ばれる湖泊や湿地帯が多く、草原放牧地となっている。

#### ②行政区画

全省の面積は約18万平方キロで、8つの地級市・一つの自治州の下に20の県級市・18の県・3つの自治県が設置されている。人口は約2739.55万人（2009年末）で、漢民族を中心に朝鮮族・満州族・モンゴル（蒙古）族・回族・シボ（錫伯）族など43の少数民族が居住している。

#### ③気候

気候は東から西へ向かい、温帯湿潤気候、温帯半湿潤気候、温帯半乾燥気候に分れている。1月の平均気温は-18度前後で長白山地区では-20度、7月の平均気温は20~23度。無霜期は5月の中・下旬から4~5ヶ月間続く。年間降水量は400~800<sup>mm</sup>で、長白山地区では年間40日以上 of 降雪日がある。

### (2) 黒竜江省

#### ①位置と地勢

省都はハルビン（哈爾濱）市。東北地方の最上部、中国の最北端に位置し、黒竜江とウスリー江を隔ててロシアと接している。平地と山地がほぼ半々に分布しており、省の中央には平均海拔800mの小興安嶺が北西から南東にかけて横たわっている。その西側は嫩河・松花江による沖積平原で、東側は黒竜

江・松花江・ウスリー江による沖積低地がロシアまで続いている。また西北部は大興安嶺の一部となっている。

### ②行政区画

全省の面積は46万平方キロで、行政区画は12の地級市・1つの地区の下に19の県級市・46の県・1つの自治県が設置されている。人口は約3825.0万人(2008年末)で漢民族を中心に、満州族・朝鮮族・モンゴル(蒙古)族・回族・ダフル(達斡爾)族・シボ(錫伯)族・ホジョン(赫哲)族・オロチョン(鄂倫春)族・エヴェンキ(鄂温克)族・キルギス(柯爾克孜)族などの少数民族が居住している。

### ③気候

気候は松遼平原が温帯性半湿潤型気候、その他の大部分が温帯性湿潤モンスーン型気候に属している。1月の平均気温は $-30\sim-18$ 度、7月の平均気温が $18\sim22$ 度で年間の気温差が35度以上ある。年間降水量は $400\sim700$ mm。

## (3) 遼寧省

### ①位置と地勢

省都は瀋陽市。東北地方の南部に位置し、東南部では朝鮮と国境を接している。西南部には遼東半島が黄海・渤海に突き出ており、遠く山東半島と対を成している。地勢は中央部が広大な遼河平原で西と東は丘陵部となっている。

### ②行政区画

全省の面積は15万平方キロ、行政区画は14の地級市の下に、17の県級市・19の県・8つの自治県が設置されている。人口は4315万人(2008年末)で、漢民族を中心に満州族・モンゴル(蒙古)族・回族・朝鮮族・シボ(錫伯)族などの少数民族が居住している。

### ③気候

気候は丹東—錦州の線以南の遼東半島部が暖温帯半湿潤気候に属し、東部は温帯湿潤気候、中部は温帯半湿潤気候、西部が温帯半乾燥気候にそれぞれ属している。1月の平均気温は $-15\sim-5$ 度、7月の平均気温が24度前後。年間降水量は $500\sim1000$ mm。冬季が6ヶ月と長い。

## 2. 日程および成果について

本節では本調査で得られた成果を日程に沿って報告する。まず、日程は下記のように大きく4つに区分したあと、次節にて詳しく述べていく。

### (1) 9月12日～14日・・・日本～吉林省1

羽田空港から北京（日本との時差は－1時間）→長白山→長白山自然博物館  
→二道白河鎮市内見学

経費（一人当たり料金 調査期間中のレート：1万円＝700元）：長白山空港から地区内ホテルまで交通費500元（片道約2時間）、長白山入場料・施設・設備利用料351元、長白山自然博物館入場料・施設利用料50元

### (2) 9月15日～18日・・・黒竜江省

長白山地区→ハルビン（長白山地区から車で片道約10時間）→ハルビン商業大学（図書館・紙幣博物館・金融研究所）→太陽島→黒龍江大学→ハルビン駅→ソフィア聖堂（ロシア正教会）→中央大通り→尚志大通り→ハルビン歴史博物館見学→長春

経費（一人当たり料金）：長白山からハルビンまでの交通費：2400元、太陽島入場券30元、施設利用料20元、ソフィア聖堂入場券20元、ハルビン—長春までの快速電車代76元

### (3) 9月19日～20日・・・吉林省2

ホテル→長春市街→長影世紀城（市街から片道1時間弱）→偽満皇宮博物院  
→旧満州国時代の重要政府機関→旧満州国神社跡地検索

経費（一人当たり料金）：交通費（ホテル車両）240元、長影世紀城入場料240元、偽満皇宮博物院入場料80元

### (4) 9月21日～26日・・・遼寧省～日本

瀋陽駅→昭陵→故宮→瀋陽植物園→福陵→永陵→汗王宮（赫図阿拉城）→桓

仁→本溪水洞（桓仁県から片道3時間）→朝鮮族伝統生活様式見学→五女山（高句麗発祥地）→瀋陽空港から日本成田空港に帰国

経費（一人当たり料金）：瀋陽駅までの快速電車代111元、瀋陽植物園35元、北陵入場券66元、福陵入場券40元、故宮入場券50元、交通費（ホテル車両）500元、永陵入場料30元、赫図阿拉城入場料：60元、本溪入場料185元、五女山入場料・施設利用料130元、本溪市内車両利用料500元

なお、本調査研究の日程と移動ルートを表した地図（①～⑤）は以下の通り（地図は「運輸事情調査 中国東北地方」の地図資料を基に筆者が作成した）。

日付	日程・用務先	省区分
9月12日	羽田空港から北京経由長白山空港に移動	吉林省
9月13日	長白山地区、天地、国境地帯	〃
9月14日	森林公園、長白山自然博物館見学	〃
9月15日	ハルビンに移動	黒龍江省
9月16日	ハルビン駅周辺、哈爾濱商業大学、太陽島、黒龍江大学、	〃
9月17日	ロシア正教会、経済発展地区の中央・尚志大通り見学	〃
9月18日	哈爾濱歴史博物館見学、長春（吉林省）に移動	黒龍江省 吉林省
9月19日	長春市街、長影世紀城、偽満皇宮博物院見学	吉林省
9月20日	長春市内の旧満州国時代重要機関見学	〃
9月21日	旧満州国神社跡地見学、瀋陽（遼寧省）に移動	吉林省 遼寧省
9月22日	北陵、故宮、瀋陽植物園、福陵見学	遼寧省
9月23日	永陵、汗王宮見学、桓仁（本溪市）に移動	〃
9月24日	本溪县に移動、本溪水洞見学	〃
9月25日	少数民族（満・朝鮮族）生活様式、五女山見学	〃
9月26日	瀋陽空港より成田空港へ、成田空港で解散	〃

移動距離：約4000km



### (1) 長白山地区：中国と北朝鮮の国境に位置する聖なる山と湖【吉林省編1】

長白山は吉林省の東南部、延辺朝鮮族自治州安図県を中心とした長白山自然保護区内にある旧火山で、頂上に天池と呼ばれる火口湖があることや第二松花江、鴨緑江、豆満江の源流がある場所として有名である。また、長白山は中国の名山のひとつに数えられるが、東西200km、南北310kmと、その規模は図抜けている。

長白山は古来より朝鮮半島やこの地で暮らす人々が聖地として崇めていたが、清代には支配民族であった満州族の発祥地として特別視され、1677年と1776年の二度にわたって入山禁止令が出されたこともある。新中国設立後の1960年に長白山自然保護区として指定され、この地区に生息する動植物を保護している。

ちなみに、長白山は朝鮮民族や満州民族にとって、民族の発祥と建国神話と深く関わる聖山とされている。また、北朝鮮や韓国では白頭山と呼ばれている。

東北三省の中ではもっとも発展を遂げている吉林省は今後東北三省の経済発展地区の中心地域として期待されているようである。その吉林省に属しており、観光資源開発や2018年冬季オリンピックの招致計画の話などもあり、今後期待されている長白山は、正直、本当の意味での国際観光地への道のりはいまだ遠く感じる。それについては後述する。

海拔2500メートル以上のところに位置する天池は言葉では表現できないほど絶景そのものであった。また、海拔1500メートルのところにある森林公園は森（湿地帯）の保護のため、板床上の散歩道が森林全域に設けられている。1キロメートルほど先には洞天滝（洞天瀑布）と谷底公園がある。

森林公園の奥にある洞天滝の落水の流れがどんどんその勢いを増しながら下流に流れ出す姿から自然の絶対的な力を感じた。

一方、天池をも含む長白山は中国と北朝鮮の国境地帯<sup>4)</sup>でもある。中国側の景観を生かした観光への関心に比べると、北朝鮮側の長白山は自然の姿がそのまま維持されている。

天池や森林公園には平日にもかかわらず、大勢の観光客でにぎわっていた。しかし、急速な発展にともなう開発のためか、長白山での中国人観光客のマナーは、喫煙場のない場所での喫煙、または喫煙場があるにもかかわらず利用せず、吸い殻やゴミのぽい捨てやバス運転の危険さ、秩序のない行動（バスへの割り込み乗車、山頂への階段で勝手な行動をとりながら上り下り区別なく進むなど）などと、国際観光地計画には今後解決すべき課題が多々あるように思われる。



写真1 中国最初の森林観光空港である長白山空港



写真2 圧倒的な迫力をみせる天池



写真3 天池に向かう途中に見える  
国境地帯



写真4 頂上休憩所（左側）と  
管理局（右側）

次に向かったところは、今年度、世界各地で生物多様性が謳われている中、私たちは中国政府によって「中国国家地質公園」として認定されている長白山とその周辺（長白山国家級自然保護区）の自然と生態系に関する資料を展示・管理している長白山自然博物館に訪れた。

ちなみに、長白山は自然資源が極めて豊富な、いわば宝山である。長白山の独特な地質、気候および地理的位置は、人類が生産、生活に用いる豊富な物質とエネルギーを供給している。このような自然資源には土地、森林、生物、水、気候、鉱山などが含まれる。

博物館をあとにして次に向かったのは近くにある二道白河鎮市内。博物館から徒歩15分くらい離れているところにある中心街に行くと、今までとは違う景色が広がる（周りは森林と道路、そして民家が少々ある宿泊ホテル周辺とは異なる、にぎやかな風景）。多くの朝鮮族が暮らしている町でもあって、朝鮮系の飲食店が多かった。朝鮮族は200万人とも150万人ともいわれているが、そのうち約50万人は韓国の国籍を取得し、韓国で暮らしているという。残りの人たちは全国に広がって生活しているとされるが、それでも多くの朝鮮族は吉林省に集中しているようである。

このように、至るところから窺える観光地計画の欠点や祖国の利益のみを掲げる中国であるが、まだ発展の途中であることを考えると、今後の展開から目が離せそうにない。



写真5 長白山自然博物館



写真6 洪水被害により崩れた散歩道



写真7 湿地帯保護のための板床



写真8 長白山生態系図

## (2) ハルビン：「東方の小パリ」・「東方のモスクワ」【黒竜江省編】

シベリア鉄道によってはるかモスクワへと通じる東北アジアの交通の枢軸であるハルビンは四季がくっきり表れる大都市で、夏は涼しく、太陽島や松華江などの観光名所があり、冬は氷統節（氷統芸術節1月中旬～2月末まで）が有名であり、世界各地から観光客が訪れる町として知られている。

19世紀末まで小さな漁村に過ぎなかったハルビンに劇的な変化を生じさせたのが、清朝と帝政ロシアの間で結ばれた不平等条約によって敷設が許された東清鉄道である。これによって帝政ロシアは鉄道の敷設、町の建設を開始したのだが、ハルビンはその中心として、人口が急激に増え、近代都市として大きな変貌を遂げた。

ロシア革命に始まる混乱が収束した1920年代後半には、ロシアを除く欧米企業の支店は1000を超え、秋林公司や馬迭爾賓館（モデルンホテル）といった現在も残る著名な欧風建築が数多く建てられた。その結果、今日のハルビンは「東方のモスクワ（東方莫斯科）」、「東方の小パリ（東方小巴黎）」などと呼ばれている。

私たちの宿泊施設がある場所は、ハルビンの歴史的な中心部であり、高級ホテルが密集している地区である。その宿泊先からバスで15分くらい（ハルビンの交通状況はひどく、毎日大渋滞であるため、実際は40分くらいかかる）のところにあるハルビン駅周辺地区はロシア風の町となっている。また、駅周辺は地方から出稼ぎで来ている人（主に農民工）たちが大勢いた。その人たちの移動手段として駅は毎日混雑し、賑やかである。

ちなみに、ハルビン駅は伊藤博文が安重根に暗殺された場所でもある。

まずは私たちが宿泊するホテルからさほど遠くない場所にある太陽島（5A級風景区）に向かった。この太陽島はかつてロシア人のダーチャ（別荘）があった所であり、この島にある太陽島公園は、人工湖である荷花湖や日本式庭園の新潟友誼園、氷雪芸術館などで有名なハルビン最大の総合公園として知られている。



写真1 太陽島の入り口



写真2 公園内にある人工滝



写真3 園内にある新潟友誼園  
(中はほとんど空状態)



写真4 松花河を背にして立つ  
不思議なオブジェ

次に向かった場所は、中央大通りの手前に位置するロシア正教「聖ソフィア大聖堂」を見学した。信仰の場である聖堂はかつて2000人の信者を収容することのできたとされるが、今やその信仰の場としての機能は完全に失われ、過去のロシア正教関連写真史料を展示やお土産の販売などを行っていた（1997年には修復作業が行われた）。入場チケットには「ハルビン市建築芸術館」と記されており、観光を目的としていることが中の様子からも見てとれた。しかし、観光を目的としているとはいえ、中に入ると案内係はいるものの、説明はなく、以前あったとされる正面に飾っていた「最後の晩餐」やその他の絵画も今はハルビンの写真（過去の駅周辺と思われる）に変わっており、全体的に聖なる場所ではなくなった様子がみてとれた。また、聖堂の中は修復作業が行われたとはいえ、外観中心となっており、内部は建てられた当時の姿のままであった。柱や天井は歴史とともに色褪せたり、剥がれおちていたり、壁には被弾の跡のような痕跡などもあったが、管理局の意図としては、訪問者に現在の姿をあえて残し、そこから歴史を感じさせるための措置なのだろうか。

現在、このソフィア聖堂はロシアとの関係もあり、中国では国家文物政策によって保護されているとされる。残念ながら現在もロシア正教の信者がこの周辺に残って暮らしているかは確認できなかった。ちなみに、この建物の中には1935年に建てられたハルビンイスラーム清真寺の模型も展示されている。しかし、ロシア正教とどういう関連があるのか、なぜ聖堂の中に展示されているのかは不明。



写真5 ソフィア聖堂外観（ロシア正教）



写真6 建物の中は過去のハルビン市街写真が中心

午後は、近くにあった中央大通りを見学した。この中央大通りはかつてロシア語で「キタイスカヤ（中国人街）」と呼ばれていた。全長1450m、幅12.34mで、多くの観光客で賑わっている（毎日が歩行者天国となっている）。通りの両側には高級ブランド品が揃ったお店や高級住宅（マンション）が立ち並ぶ。ワシントン隣にある尚志大通りにはロシアレストランや高級百貨店が並ぶ通りであり、ロシアからの観光客団体が買い物を楽しむ姿も見られる。ちなみに、現在、ハルビンでは飛躍的な経済発展による地下鉄工事が地域に全体で行われており、2012年完工予定である。しかし、一日平均300台の車が販売され、道路は車で埋め尽くされる。猛スピードで増加する車両対策として町のいたるところで道路の拡張工事が行われてはいるが、車の増加率に対して工事の方はそれに全然追い付かない状況にある。そのために、ハルビン中心街は毎日大渋滞に陥る。ハルビンはもちろん、全国の大都市においては普段バスで10分程度の距離もハルビンでは30分以上かかる。



写真7, 8 欧風建築が立ち並ぶ中央通りやその中にある高級住宅の様子

ハルビン市内の調査が終了した後は、哈爾濱商業大学に行き、経済大学院院長の趙先生と項副院長先生に会い、中国およびハルビンの経済開発について話を伺った。話し合いでは、ハルビン商業大学と國學院大學における学术交流を図ることに関する話もあった。具体的には両大学の大学院生を交換留学させる、共同研究を行うなどといった計画話であった。その後、大学の図書館を見学し、紙幣博物館で趙院長が30年間集めた中国紙幣が展示されている紙幣史館（なかには日本が発行した紙幣なども多く展示されていた）やハルビンの経済発展の史料が展示されている金融研究所を見学した。金融研究所では昭和12年のハルビン地図が展示されており、偶然にもその地図には昭和12

年当時の神社が表示されていた。しかし、ガラス越しで観察した限りでは具体的な神社の位置まで確認することはできなかった。研究所以外での地図入手についても不明。また、國學院大學で歴史学博士学位を取得し、黒龍江大学で政治経済学を教えている安先生に会い、ハルビンの歴史や世界政治経済学について色々な話を交わした。



写真9 高い所から見下ろしたハルビン中心街の様子



写真10 改装工事で新しくなった博物館

## 中国の交通状況について

コラム1

本文中にも幾度か触れているが、全行程を通じて感じた中国の交通状況を一言で表すと「滅茶苦茶（めちゃくちゃ）」という表現が最もお似合いであろう。

1990年代から中国経済は持続的に高度成長を続けており、都市化の急激な進展に伴って、都市経済や社会活動は日に日に活発になっている。このような情勢下で、都市交通もいまだかつてないスピードで発展してきた。中国の都市交通の将来展望は、先進諸国がこれまで歩んできた車社会の利便性や快適性などの社会的弊害と大量自動車交通によってもたらされる交通渋滞、大気汚染、交通事故の多発などの社会的弊害というジレンマに陥ることになる。こうした弊害に対して、今のうちにその対策と方向性を見出していかなければならない時期に差しかかっている。既に中国の主要都市、特に北京やハルビン、瀋陽などの大都市での交通問題はきわめて深刻である。

現在、中国において鉄道は省間輸送の主役となっており、高速道路の建設も非常に速さで進展している。都市内の交通輸送体系についてはいくつかの都市で地下鉄、都市電車等高速軌道交通が建設されているが、現状では、国内にはまだ高速軌道交通システムが完備している都市は無い状況である。また都市交通の最大の問題として自動車の増加が挙げられる。特に経済発展による所得の増加に伴い、使用自動車が著しい勢いで増加している。重体を解消するために多くの都市では公共交通の発展に力を入れており、自動車数量の抑制が必要となるが、今後、長期的にその増加傾向は継続すると予測されている。

また、中国の大都市では交通渋滞、駐車場不足、交通秩序の混乱、交通公害、都市計画、公共交通システム、法規体系、交通道德などの様々な問題が表面化している。急速な自動車の増加により都市交通は需要と供給がひどくアンバランスな状態である。また大部分の大中都市は歴史が古く、多くは都市機能が中心部に集中する単一中心モデルであり、必然的に交通渋滞を引き起こす都市構造になっている。さらに、公共交通システムの全体レベルが高いとはいえず、多くの問題を抱えている。都市計画策定については、基本的に全ての都市は産業管理部門が主導して都市全体発展計画を制定するが、計画性定時、多くの都市では交通工事と交通管理の専門家を参与させていない。また、交通事故の発生は様々な原因があるが、交通道德意識が低く、交通法規を重要視しないことが事故発生の重要要素となっている。



毎日渋滞に悩まされる道路  
(シャンガンさんより提供)



駅周辺や構内は人混みで常に大混雑

© (財) 自治体国際化協会CLAIR REPORT NUMBER 268より

## (3) 長春：都市計画に基づいた理想的な都市、旧満州国から現代へ【吉林省編2】

長春市は中国東北部に位置し、200年余りの歴史を持つ吉林省の省都。長春市は国家の衛生城、軍人とその家族を支持する模範城である。また、長春市は全国園林緑化先進都市、全国始めの優秀旅行都市などの名誉を獲得した。緯度的には北海道旭川市とほぼ同じで地勢は平で広い。省都として政治、経済、交通の中心地であり、自動車産業や農業では中国でも有数の実績を誇る。

羽田空港を発って長く思えた調査が早くも折り返し時点を迎えた。今回の調査は東北三省において省間、省内での移動にかなりの時間を費やした。だが、大きなトラブルなく順調に調査ができたのは、事前に移動距離と移動方法について綿密に検討を行ったことと、今回の調査メンバーのうち、現地に詳しい人がいたおかげなのである。

午前中にハルビン歴史博物館をみて、快速電車に乗って長春市に移動した。

今日の最初の見学地は長春駅から南にまっすぐ延びる人民大街を中心に成り立っている長春市街。多くのバスの発着地である長春駅前や人民広場付近には繁華街の重慶路や多くのホテルが密集している。



写真1 郊外にまで開発は進んでいる  
(長春行きの電車車内で撮影)



写真2 改装工事が進行中の長春駅の  
外観

次に私たちが向かったのは経済開発地区である長影世紀城。この施設はもともと満州国の国策会社である満州映画協会で、関東軍の宣伝部的な役割を担うために南満州鉄道株式会社（満鉄）の映画班として1923年に発足した長春電影製片廠の敷地内から今の郊外に移転されたものである。この長影世紀城は中国第一家世界級映画娯楽園として知られている。また、この施設まで

はモノレールが建設されており、周辺は開発作業が行われている。その姿から現在の中国経済の発展ぶりをうかがうことができた。



写真3 長影世紀城の案内図



写真4 大阪のUSJに似た長影世紀城の様子

午後の日程は、ラストエンペラーとして有名な溥儀のかつての宮殿であった偽満皇宫博物院。満州国皇帝に即位した愛新覚羅溥儀が新宮殿完成までの仮宮殿として執政した宮廷府であるが、太平洋戦争勃発により建設が中断されたため、在位期間の1932年から1945年までをここで過ごした。入口を通過してまず目にするのは意外と溥儀の競馬場である。入口付近には溥儀が乗っていたとされる馬車を見ることができる。溥儀の馬車庫の隣にある長春門をくぐると、緝熙楼、勤民楼、懐遠楼、同徳楼を順番に見て回ることができる。特に、緝熙楼の東側に建っている同徳殿は日本人による設計で、1983年に落成。溥儀と最後の皇妃李玉琴が生活する場であったとされる。さらに、2005年からの修復によって、同徳殿東側にある東御花園地下の防空壕や建国神廟跡などが整備公開された。修復前は壁に塗り込められていた建国神社の鳥居も復元された。焼き払われた建国神社の跡地の隣には天照大神防空壕もあったが、入口の扉には鍵がかけられ、入ることは出来なかった。

この博物院は入口からすると狭い感じがするが、実際見て回るには細かい所を省いても最低3時間以上はかかる。また、日曜日のためか多くの団体客に出会ったが、その中に日本人の姿はいなかった。

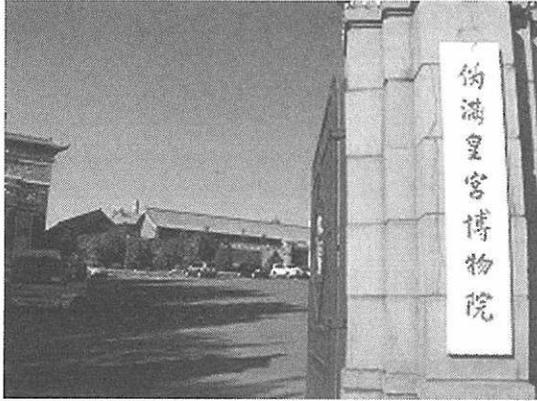


写真5 中国にとって満州国は屈辱であったことを「偽」という文字からみてとれる。



写真6 映画ラストエンペラーのロケ地としても有名な会議室



写真7 建国神廟の跡地や天照大神防空壕（左）

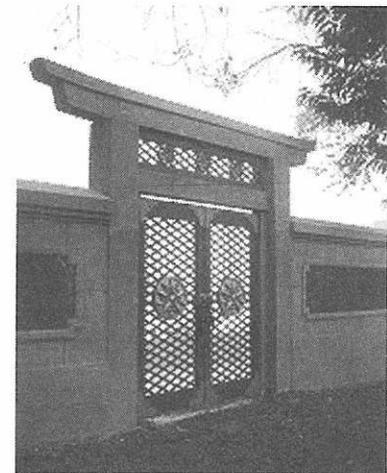


写真8 綺麗に修復された鳥居

長春の2日目の最初に訪れたのは満州国の最高行政機関である偽満州国務院である。この建物は1934年に起工し、1936年に竣工した。日本の国会議事堂のデザインをベースに、興亜式とよばれる西洋古典様式と中国古典様式を融合させた中西折衷の建築スタイルで設計された。当時、地下道によって長春駅や関東軍司令部（現在の中国共産党吉林省委員会）とつながっていたとされている。現在は吉林大学基礎医学院となっており、残念ながら部外者が見学することはできない。

次に向かった先は、満州国の実質的支配の象徴であった旧関東軍司令部である。この庁舎は1932年に大手ゼネコンによって起工され、1934年に竣工。帝冠式ともよばれる和洋折衷の建築様式である。満州国の遺構群のなかでも

とりわけ違和感と威圧感のまざった異彩な雰囲気を持っている。現在は中国共産党吉林省委員会が使用している。

上記のところで紹介した偽満州国務院と同様、この旧関東軍司令部も部外者の見学を許さない。それだけでなく、正面真正面から安易に撮影をしてはいけないとされている。とくに、私たちの調査期間に中国国内で起こった反日運動（尖閣島関連問題、9.18事変によるもの）などによって警戒が強化されていることもあり、道路の反対側から斜め向きに数枚撮影を済ませた。さらに、最近この建物の周辺には中国政府に対して告発・嘆願を目的に毎日のように多くの中国人市民が集まるようである。（筆者目撃・聞き取り）

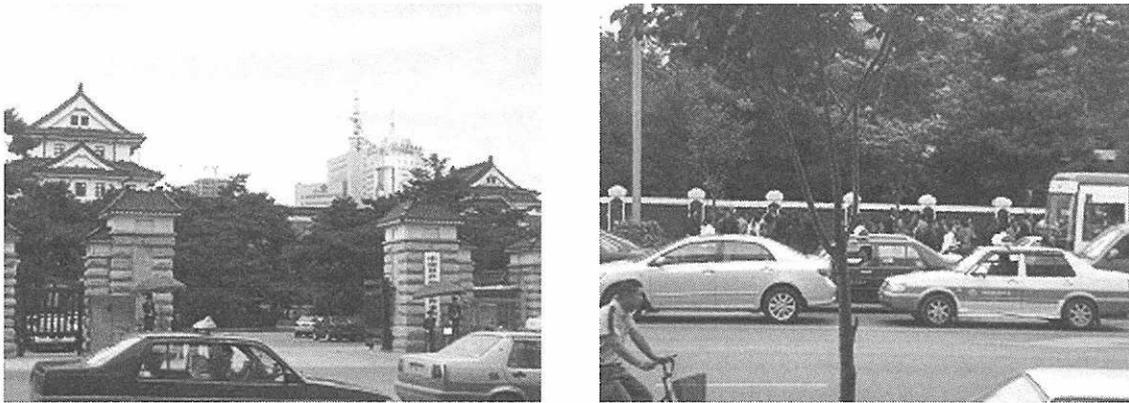


写真9, 10 旧関東軍司令部の外観と政府機関に集まる人たち  
（厳しい規制のため道路向かい側で撮影）

次は長春の中心部である人民広場から東側にある中国モスクの清真寺に向かった。人民広場から清真寺までは4 kmほどだが、調査当日は目的地まで移動中に周辺の調査も兼ねていたため、清真寺までの所要時間は約3時間。まず、長春駅の東部にあったとされる旧満州国時代の日本人住宅を見学した。今となっては周囲の建物とは姿がまったく異なっており、一目で過去の遺物であることに気付いた。この周辺一帯にある古い建物は取り壊し作業が行われている。目的地に向かう途中、経済発展とともに建てられた新しい建物と無造作に開発作業が進んでいる周辺の姿はこの吉林省だけでなく、中国のいたるところで見ることができる光景の一つだ。



写真11, 12 旧満州国時代の日本人住宅と思われる建物(左)も含め、地域の至る所は開発が進んでいる

かなり遠回りにしてようやく目的地である清真寺は長通路側から仏教様式で建てられた建物の一部が見えるため、見つけることは意外と容易であった。道路沿いから清真寺につながる10mほどの道の両側にはイスラーム教徒の食堂、羊肉売り場、小さい宗教百貨店(イスラム系)などがあった。驚くことに、道の脇に煉瓦で囲った狭いスペースの中では羊が飼育されており、その前でムスリムのような男が羊を仕留めて捌き、部位別に捌かれた羊肉はそのまま路上で販売されていた。清真寺に続く道は宗教施設のもつ神聖なイメージとは裏腹に、羊の血で真っ赤に染まっており、周囲は死臭や動物の糞臭が漂っていた。

清真寺の中は礼拝堂や複数の建物があり、綺麗に整備されていた。私たちがここに着いたのが12時ごろ、午後の礼拝準備のためか、多くの教徒が集まっていた。一人のムスリムの話によると、このムスリムたちは必ず1日5回礼拝を行っているようである。

敷地内の建物一部には「愛国愛教」と書かれており、事務所と思われる建物の入口辺には国家宗教事務局令(2010年3月1日施行)の全内容や礼拝方法や注意図などが大きく貼られていた。その様子から中国の宗教政策の機能がどのように働いているかを端的に見ることができる。



写真13 清真寺の外観

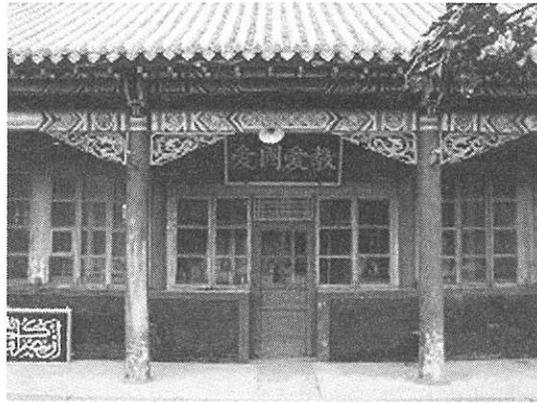


写真14 正面の「愛国愛教」が目立つ

昼食後、再び町の中心街に出た。人民広場はホテル地区と商業地区で成り立っているだけに、大通りの周辺には銀行、大型デパート、高級ホテルなどが密集しており、その裏側には細い道を埋め尽くすかのように小汚い店が並ぶ。町を歩いてみると、偶然にも中国最大のチェーン店型書店の新華書店があったので立ち寄ってみた。全国にある書店だけあって1階から5階まで、様々な分野の本がたくさん置いてあった。2階の「社会科学」と並んでいる「宗教」部門には道教・儒教・禅座・仏教関連書籍が中心となっており、海外の宗教をテーマとしてもものは韓国の儒教史、韓国の仏教史程度。

他方、不思議なことに、中国共産党による宗教政策上、宗教の宣教活動は禁止されているはずなのに、教団の宣教紙と思われるビラや小冊子を配る女性たちの姿を多々目撃された。

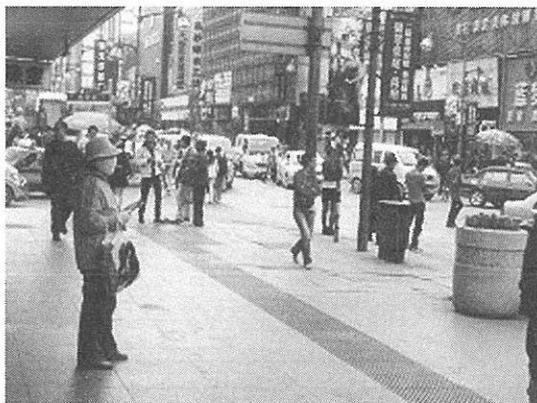


写真15, 16 人民広場の様子と街中で怪しい服装で教団紙を配る女性の姿 (右) は意外と見かけやすい

## 中国北部のイスラーム建築：長春

コラム2

中国のモスクは「清真寺」(シンズンスー)と呼ばれる。中国では「清真」と書いた食堂をよく見掛けるが、これはイスラームがタブーとする豚肉を一切使っていない(主に羊肉を使用)イスラーム料理店のことを言う。



中国東北部の遼寧省に回族が移住してきたのは遅く、17世紀末からであって、19世紀以前のモスクは現存しない。長春の清真大寺は最も名高いが、吉林省の省都である長春自体が20世紀になって発展した町であるから、伝統的なスタイルをとっているとはいえ、このモスクもまた20世紀の新建築であると言える。

1932年に日本が満州国を建国して植民地とすると、この町を首都にして新京と名づけ、多くのコロニアル建築を建設した。都市が発展するとともに回族のムスリム人口が増え、立派な清真大寺の建立につながった。現在のムスリム人口は約3万で、清真大寺は吉林省の「文物保護単位」(重要文化財)に指定されている。

ラスト・エンペラー溥儀の住んだ宮殿(現・偽満皇宮博物館)にも近い市街地でありながら、大通りから奥へ引き込んだ閑静な敷地に、極彩色の清真大寺が配されている。この場所に創建されたのは1862年であるが、現在の規模に拡張されたのは20世紀のことである。

礼拝大殿は切妻3棟の連棟から成り、その手前に巻棚屋根の前廊がつき、さらに一番奥の後審殿(こうようでん、ミフラーブ室)が独立的な三重塔のような姿をとるといふ、規模の大きなものである。外壁が磚造であることを除けば、すべては木造で、とりわけ前面ファサードと塔状部が朱色を主とする極彩色に塗装されている。特に斗拱の部分は華やかで、絵画的である。

このモスクで最も際だっているのは、後審殿の塔であろう。中国北部ではミフラーブ上部を吹抜けにして六角形または八角形の塔状にすることがよく行われるが、その行き着いた最後がこのミナレット状の三重塔である。1階を磚造の基壇のごとくになし、その上に高く軽快な丹塗りの望月楼を建てたシンボリックな姿は、これが単にミフラーブ室であるとは、外観からは想像しにくい。こうしたミフラーブ・タワーは、中国以外、世界のいかなる地域のイスラーム建築にも見出すことがない独特のものである。

© 建築家 神谷武夫

[http://www.ne.jp/asahi/arc/ind/6\\_china/northern/north.htm](http://www.ne.jp/asahi/arc/ind/6_china/northern/north.htm)より

#### (4) 瀋陽：清朝の古都、東北三省最大の都市【遼寧省編】

遼寧省の省都である瀋陽市は、漢族を中心に29の民族が住む東北三省の中でも最大級の都市のひとつである。瀋陽と呼ばれるようになったのは元代の1296年、このエリアが瀋水の北に位置するため、行政区の名称を瀋陽路と改めたからである。

その後、女真族マンジュ部のヌルハチが女真族を統一して後金国を建国すると、1625年にはその都盛京となった。その後国号を清と改め、順治帝が北京に遷都したあとは第二の都とされ、1657年に民政機関である奉天府が設置された。

18世紀末以降は、帝政ロシア、日本の勢力下に入り、最重要都市として町は発展を遂げていった。満州国成立以降は奉天と改称された。

中華人民共和国成立後は、重工業都市として発展を遂げ、その後1990年代は停滞期であったが、近年は回復し、大瀋陽経済圏構想を立ち上げるに至った。

瀋陽では主に経済発展、経済開発計画と歴史遺産（宗教施設をも含む）の復興に注目して調査見学を行った。

瀋陽の町にはいくつかの核となるエリアがある。そのうち、私たちが調査見学した内容からは、まず瀋陽故宮を中心とするエリアであり、瀋陽でもっとも古い場所が挙げられる。ここは清代に奉天城がおかれたところで、その名残として城門や城壁も残っている。それらの姿や多くの老舗が並ぶ中街の様子は故宮の周辺地域からうかがえることができる。ふたつ目は、瀋陽北駅周辺に建設が進む金融ビジネス街が挙げられる。さらに、瀋陽北駅のほかに遼寧省高速バスターミナルなどもあり、他都市に移動する際の拠点にもなっている。

では、調査見学の順番にみていこう。

まず、都心部から割と近いところにある昭陵。昭陵は、総敷地面積が330万 $m^2$ にも及ぶ太宗ホンタイジと孝端文皇后の陵墓である。市街の北に位置することから北陵とも呼ばれている。

陵墓は下馬牌に始まり、神橋を渡り、石牌坊とそれにつづく大紅門、そして両脇に石獣が並ぶ神道につながる。さらに、神道から北に位置する方城がこの昭陵の中心である。方城の中心には隆恩殿が、後方には月牙城と宝城がある。宝城の中には宝頂があり、その下にホンタイジと孝端文皇后が埋葬さ

れている。

昭陵は1949年の中華人民共和国成立以降、徐々に拡張工事がされ、現在も進行中であり、陵墓一帯がさまざまな娯楽施設を有する北陵公園となっている。我々が訪れた日も広々とした公園で楽しい時間を過ごす大勢の様子が観察できた。

次に訪れたのは故宮。

故宮は、市街中心部の瀋河区瀋陽路に位置する清朝黎明期の宮殿である。

1625年、女真族国家である後金が遼陽から瀋陽に遷都した際に創建され、1636年に落成した。清朝建国の礎を築いた太祖ヌルハチと清朝初代皇帝、太宗ホンタイジのふたりは実際にここに住んでいたとされる。

敷地面積約6万km<sup>2</sup>に及ぶ故宮は、20余りの庭園と大小90余りの建築物で構成され、おもに東路・中路・西路の3エリアに分けられる。東路の著名な建物としては皇帝が式典を行った場所である大政殿と清初、貴族や大臣が政務を行っていた十王亭が挙げられる。

中路にはホンタイジの時代に建てられた大清門、崇政殿、鳳凰楼、清寧宮が並ぶ。そして、西路には四庫全書を収容する文溯閣がある。



写真1 広々とした公園は余暇を楽しむ人で賑わう



写真2 ホンタイジ(愛新覺羅皇太極)像



写真3 昭陵の大紅門と神道



写真4 方城の正門、隆恩門

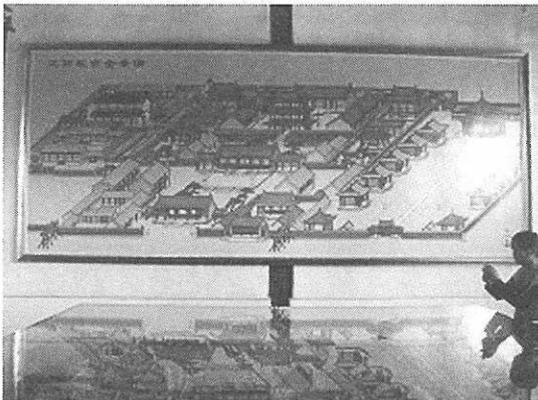


写真5 故宮の案内図



写真6 故宮の大政殿と十王亭

故宮から出て東郊外にあるのは、太祖ヌルハチの陵墓福陵と瀋陽華博の会場となった植物園。

まず、瀋陽植物園は瀋陽市中心部から東に約20kmの郊外に位置する。総面積は211万m<sup>2</sup>（東京ドーム45個分相当）。植物園の周辺は連綿と続く丘陵地帯であり、その広さからの風景は大陸にいることを実感させてくれる。

園内には東北、西北、華北、内モンゴルなどの1700種余りの植物が植えられ、絶滅の危機に瀕している希少な植物も見られる。さらに、園内には遊園地施設もあって、連日多くの人で賑わう。

植物園からさほど遠くないところにある福陵は太祖ヌルハチと孝慈高皇后の陵墓である。市区の東郊外にあることから東陵とも呼ばれる。1629年に建設が始まり、1651年に完成した。清代には毎年さまざまな祭祀が執り行われていたとされる。

正紅門をくぐると松林に覆われた神道があり、両脇には昭陵同様、石獣が

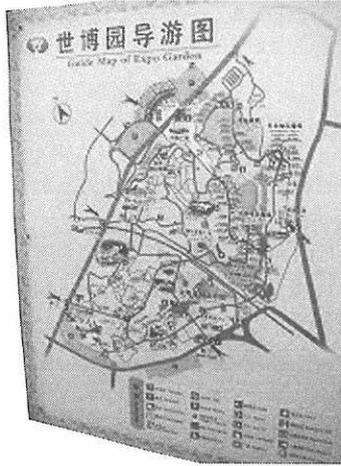


写真7 植物園案内図

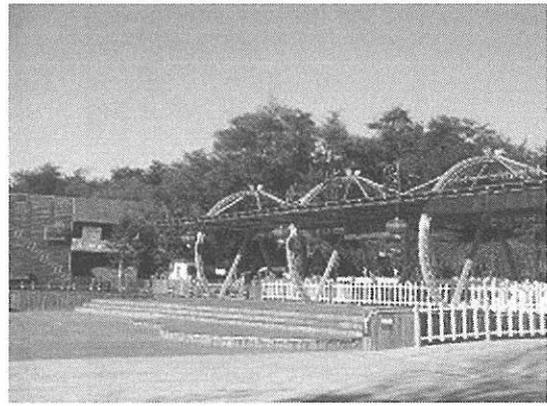


写真8 瀋陽植物園の入り口

並んでいる。神道の先にある108段の石階段を上りきったところに碑亭があり、その後方に方城がある。祭祀を執り行う場所であった隆恩殿のうしろには福陵の中でも最も高い建物である大明楼が建っている。

全体的に福陵と昭陵の構成はよく似ていると思うが、福陵のほうが山の麓にあるため昭陵に比べて北に行くほど地勢が高くなっていくのが特徴である。

朝早く出発して夕方遅くまで1日を通して時代を遡る形で清朝の陵墓や広大な広さを誇る植物園をみて瀋陽での1日目はこれにて終了した。

中国全国規模で経済発展が盛んに行われており、その影響は町の至るところからうかがえることができる。経済が潤い、人々の生活が豊かになったためか、文化遺産の修復もともに盛んに行われるようである。実際のところ、今回調査見学を行った多くの文化遺産からは北京オリンピック以後修復作業が盛んに行われたことが容易に確認できた。



写真9 福陵、五鳳楼から見た方城



写真10 福陵の隆恩殿

また、故宮や福陵のように世界遺産に登録されているところもあれば、まだA4級止まりの文化遺産は中国政府（共産党）の支援を受けてA5級を目指し、園内の整備を整えている様子もうかがえた。

2日目の予定は桓仁（本溪市の中に本溪县、桓仁県がある）移動中に、永陵や清王朝の発祥地である赫図阿拉城の見学であった。そのため、朝早く瀋陽から東へおよそ車で2時間ほどの離れたところにある永陵に向かった。向かう途中先に寄ったのはヌルハチが後金を樹立した後の最初の都城である赫図阿拉城（ホトアラ）。現在はホトアラ老城と呼ばれている城趾は、かつての興京老城の旧称で、2006年5月に国の重要文化保護材の指定を受け、広大な史跡公園として整備されている。

満州語のホトアラを漢字に当てた「赫図阿拉城趾」の碑が、入口近くに建っている。我々はそこから少し坂道を上ると現われる北門から城へ入った。北門付近では満州族の民族衣装をまとった女性ガイドがいた。さらに広大な面積を見て回るのに必要な電動車両も並んでいた（有料）。

この赫図阿拉城老城にはヌルハチが政務を行なった場所である「汗宮大衙門」や史跡公園のほぼ中央にある「汗王井」、そしてヌルハチの生家などとヌルハチ在世時のホトアラ城の様子を伺わせる史料が残っている。

赫図阿拉城老城を見て次に向かったのは今回の調査期間中に見て回った陵墓のうち、最後である永陵。ちなみに、調査研究の日程は距離や移動のことを考慮した結果、北陵(昭陵)→故宮→東陵(福陵)→永陵と、歴史的順番ではない。



写真11 赫図阿拉城、北門

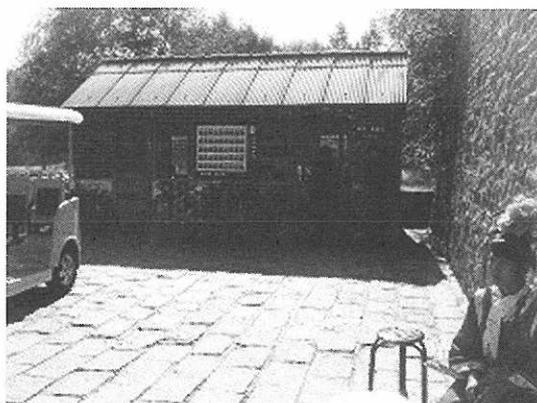


写真12 案内所にいる満州族伝統衣装のガイド



写真13 ヌルハチが政務を行っていたとされる建物



写真14 ヌルハチの生家前にて

永陵は撫順市新賓満州族自治県の永陵鎮の西北、啓運山の南麓にあり、清王朝を創設した愛新覚羅氏の先祖を祀る墓地である。かつては興京陵といい、清の太祖ヌルハチが祖先を埋葬するために明の万暦26年（1598）に築造し、清の順治16年（1659）に現在の永陵に改称された。大清の第一陵でもある。

正門の正紅門から陵墓区に入ると、前方に4つの神功聖徳碑亭が横一列に並んでいる。向かって右からの順番で「景祖翼皇帝」、「肇祖原皇帝」、「興祖直皇帝」、「顯祖宣皇帝」の4祖の碑亭となっている。皇帝と書かれてあったが、周知の通り、ヌルハチから遡る4代の愛新覚羅氏は女真族の一部族長にすぎず、皇帝ではなかった。こちらに書かれている皇帝の称号は後代の追贈である。

4つの神功聖徳碑亭の真ん中に築かれた参道を進むと、碑亭から宝城へ入る門である啓運門がある。その啓運門を抜けて宝殿の境内に入ると、中央に4皇帝の位牌を祀る敬運殿がある。

この永陵には興味深いところが2か所ある。1つ目は敬運殿に掲げられた扁額であるが、そこには満州文字、漢字、蒙古文字で書かれているのである。それはつまり清朝は満州人だけの国家ではなく、満州族・漢族・モンゴル族の三族によって支配された連邦国家であることを意味しているのだろうか。

2つ目に敬運殿の後ろに四祖の陵墓があるとガイドの説明があったが、実際のところ、少し高くなった場所に草が生い茂ってはいたが、土饅頭のような墓が3基しか確認できなかった。4祖の陵墓がなければならぬはずだが、

もう一基の所在は分からなかった。ちなみに、3基の墓はそれぞれヌルハチの先代、先々代、そして6代前の先祖のものである。



写真15 永陵の入り口からみると、道路が長い参道のように見える



写真16 永陵、陵墓前に並ぶ碑亭

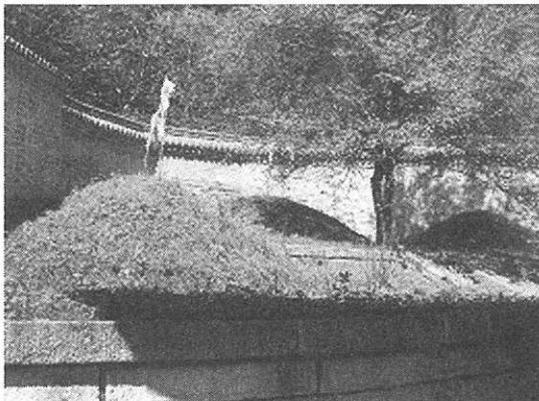
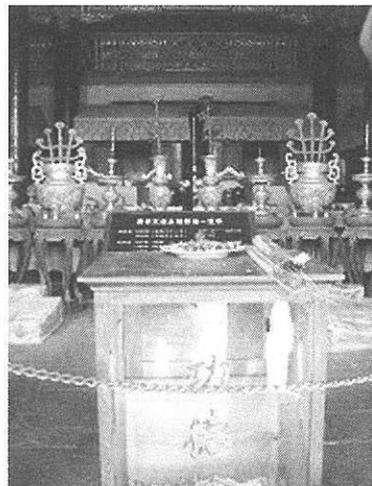


写真17 永陵、敬運殿の後ろにある陵墓

今回の調査出張において清朝皇帝陵をめぐる調査結果からはさらに興味深いことが発見できた。まず写真資料の①焚帛亭（祭壇で祝詞を奏上したあと、その紙を焚帛亭に入れて燃やす）や②启伝殿内に先代皇帝（先祖）供養目的として設けられているとされる祭壇、③墓の真ん中にある神樹からわかるように、ヌルハチの墓のある永陵には政治的要素（故宫は政治的性格が強いとされる）はまったく存在せず、むしろ宗教的性格が強いといった印象をうけた。しかし、時代とともに祭壇や焚帛亭、神樹のような存在は簡素化もしくは無くなる。



①永陵、焚帛亭



②ご先祖を祀っていたとされる祭壇

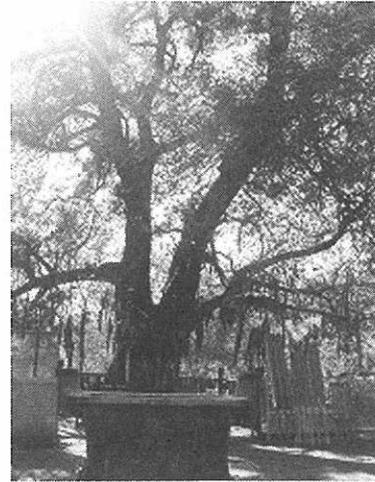


③陵墓の真ん中にある神樹

2つ目に、赫図阿拉城の写真資料の①願いの叶う井戸（井戸の水に触れると願いが叶うとされる）、②ご神木（願いを書いた赤紐を木の枝に結び付けるまたは健康・安泰などの願いが込められているとされる錠前を神木の周りにとりつける）、③神堂（見学当日は入口が塞がれ、中では祭式の稽古?を行っていた）、④民家で行っていた祭式道具（日本の神棚のようなものもあった）などから祖先崇拝（日本の仏壇の機能をもっているのだろうか）を基本とする宗教（信仰）行為を垣間見ることができた。



①願いの叶うといわれる汗王井



②枝に願い紐がたくさん飾られている御神木



③神堂の写真



④民家でよく見られる祭式道具や祭式棚

調査を終えたあと、いよいよ、今回の調査研究も終盤を迎えることとなり、その終着先である桓仁満族自治県内に入った。桓仁県は14の少数民族から成り立っており、満族自治県（約32万人）となっている。人口は約10万人。桓仁は高句麗の発祥地のほかに、清王朝発祥の地、中国易学標本地でもよく知られている。文化局の局長である金さんによると、桓仁の生態環境保護政策は中国でもトップレベルを誇るそうで、他にも水資源が豊富であり、第1飲水工事によって6つの省に水を供給（今回宿泊したホテルの近くに第6/6水道管理局があった）しており、現在計画中である第2工事は中国全土への飲水供給を目標としているという。

ちなみに、昼食と夕食は桓仁県文化局の局長や副局長、財務局の局長、その他政府（中国共産党）関係者と同席し、最近の町の経済状況や文化遺産およ

び宗教施設を利用した観光産業状況について話を聞いた。その内容について以下のところで紹介しよう。

Q：この町の正式地名と町の人口について

A：地名は永陵鎮。人口はまだ3万人ほどと少ないが、最近では田舎から人が集まってきており、他の地域からもそのような町であると知られている模様（おそらく、この地域が今後発展することを知っての行動であろう）。

Q：2004年永陵が世界遺産に登録されてから町を訪れる観光客数はどれくらいあるのか。

A：登録された年度（2004）と翌年（2005）は急激に増えたが、2006年からは通常の状態に戻った。

Q：文化局としては観光客をもっと増やしていきたいか？

A：すでに文化局の下に観光局を設けてあり、日本や韓国を対象に活発な宣伝（広告）活動を行っている。もちろん、すべては観光客数を増やすためである。

Q：宣伝（広告）活動の方法について

A：主にインターネット（ウェブサイト）、現地（外国）での宣伝活動が中心となる。また、永陵や故宮などの陵関係施設を近いうちに日本で展示会を開くといった計画も立っており、それに向けて日本側の関係者との交流が進んでいる。

Q：現在、永陵を訪れる観光客数は何人？それと文化局が目標としている客数は？

A：年間平均10万人程度、とくに目標人数は定めてなどいないが増えたら嬉しい。

Q：世界遺産に登録されたあと、住民の反響や経済面との関係について

A：現地住民にとっては町の主な産業となる第3次産業（飲食・宿泊施設など）が活性化され、経済的の面からは、来年完成予定の高速道路・高速電車による経済効果は十分期待できるであろう。

（筆者聞き取り）

本溪县と桓仁県（桓仁満族自治県）からなる本溪市は自然保護を重んじている。その中でも本溪县にある本溪水洞（A4級）はアジア最大の鍾乳洞であり、できるだけ自然の姿を残して観光化したところで毎日多くの観光客で賑わう。

また、桓仁県には朝鮮族が大勢暮らす町もあって、現地では知人の紹介によって朝鮮族伝統生活様式を見学することができた。その後、高句麗発祥地とされる五女山に向かった。入口にある高句麗博物館を見学したあと、実際

五女山に行くこととなったが、その我々の前に現われたのはただならぬ999階段であった。ただの石階段ではなく、足場が非常に狭く、傾斜が急で、危険な階段道となっていた。一緒に登ったガイドさんも「ここまで険しい階段はほかにない」「我々としてもこの階段はきつい」というほど。しかし、999階段を登りきったところから見下ろす風景は絶景そのものであった。かつて夫余族の朱蒙が夫余から逃れ、遼寧省と吉林省を流れる現在の渾江（かつての卒本川）辺りであるこの五女山に五女山城（卒本城）を都として高句麗を建国したとされている。五女山城に行くには険しい999階段があったところのみ。五女山に向かう途中車の窓から覗いた五女山は山のほうに突き出ており、緑に覆われた巨大な岩のような感じがしたが、実際は山城の周りは崖や険しい渓谷になっており、外部からの侵略はほぼ不可能、美しいだけでなく、天然の自然の楯に守られた、まさに難攻不落の要塞でもあったのだ。



写真18 入口から見上げた五女山山城



写真19 終わりの見えない階段道



写真20 山城展望台から見下ろした湖のような貯水池

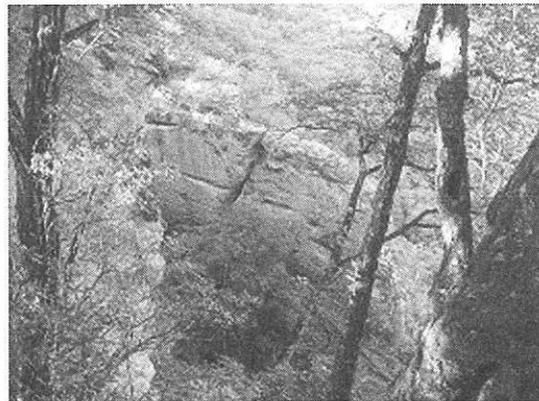


写真21 周辺は断崖絶壁、まさに難攻不落の城

### むすびにかえて

今回の調査出張は、本学の「共存学」研究プロジェクトの一環としての中国東北地区における調査研究を目的として行われた。具体的には「中国における社会経済の変動と伝統的価値観の復興に関する学際的研究」をテーマとして調査研究を行った。

報告内容は既述の通り①東北三省の経済発展の様子を捉える、②生物多様性との関連性を探る、③伝統文化・宗教施設復興を確かめる、の3点についてまとめてみた。その作業には中国の調査訪問先である黒竜江省・吉林省・遼寧省では現地における協力者の惜しまぬ助けがあった。そのおかげで限られた期間内にトラブルなく無事に調査を終えることができたことはいうまでもない事実である。

では、上記に挙げた3点の報告内容をまとめてみると以下の通り。

#### ①東北三省の経済発展の様子を捉える<sup>5)</sup>

中国は1978年の改革・開放政策以後、高い経済成長率を維持し、経済発展を遂げてきた。しかし、政治的、歴史的、地理的、資源的な原因により、各地域の経済発展水準には大きな格差が存在し、それぞれの地域に留まらず中国全体の政治、社会に大きな影響を与えている。

遼寧省、吉林省、黒龍江省の東北三省は、1949年の中華人民共和国建国当初から、ソ連と国境を接するという地理を生かし、また、石油・石炭等の地下資源にも恵まれ、それらを活用した鞍山鋼鉄（遼寧省）、第一汽車（吉林省）、大慶石油（黒龍江省）などの素材、エネルギーなど基幹産業の大型国有企業が立地する、国内最大の重化学工業基地として中国経済をリードしてきた。

しかし、80年代以降、改革開放に立ち遅れたことによって、市場経済を主とするという考え方、国有企業を主とするものからの体制転換、重工業を主とする経済構造の調整、外資導入を主とする対外開放、郷鎮企業や民営企業を中心とする非国有経済の発展、以上のいずれにおいても南方とりわけ東南沿海地区に大きく差をつけられてしまったのである。

その結果、東北三省の経済の発展テンポが東南沿海地区に比べ大きく落ち込み、東北三省の全国に占める地位が明らかに低下していった。

この状況の打開を目指して中国政府は2007年8月20日に、2020年までを視野に入れた東北地域の経済振興計画を定める「東北地区振興計画」が国家発展改革委員会と国務院振興東北地区等旧工業基地指導グループ弁公室より発表された。具体的には以下に述べる東北地区の振興において抱えている諸問題

- ①非公有制経済の発展が不十分で市場化程度が低く、発展の活力に欠ける。
- ②ハイテク産業とサービス業の比重が低い。装備製造業の製品組立能力と集積能力の向上が必要。原材料の加工水準が低く、企業の自主開発能力が低い。
- ③就職と社会保障の要求が大きく、民衆の生活は困難。
- ④資源供給能力が低下し、一部の区域における環境汚染が深刻。
- ⑤資源型都市、特に資源枯渇型都市の持続的な発展能力が低く、代替産業の発展が緩やかで社会及び生態に問題が生じている。

に対してその問題を解決すべく、東北地区振興計画では、

- ①改革開放
- ②構造調整
- ③地域内の協調した発展
- ④資源枯渇型都市の産業構造転換
- ⑤省エネルギー・環境に優しい社会の建設
- ⑥教育・衛生・文化・体育等の社会事業の発展

の6分野に分けて同時発展を目指す指導方針をたてて現在進行中である。本調査で訪れた遼寧省、吉林省、黒龍江省の長白山地区、瀋陽、ハルビン、長春などの東北三省主要都市から、東北振興政策によって経済が堅実に成長している様子が確認できた。

## ②生物多様性との関連性を探る<sup>6)</sup>

中央政府が古くから続く工業地帯である東北工業拠点の振興政策を打ち出して以来、遼寧省では循環型経済モデル事業の重点を定め、計画的かつ段階

的に建設が進んでいる。しかし東北工業拠点は長期にわたる計画経済体制の下で蓄積した多くの問題を抱えており、深い次元での構造的な問題が多い。中でも環境問題が特に突出している。

遼寧、吉林、黒竜江省の東北三省は将来的に、深刻な環境危機に直面する見込みで、2010年までに遼河、松花江、黒竜江、ウスリー川などを含む「松遼流域」一帯は現在の汚染状況が急速に深刻化する予測がある。

そのような問題に対して東北三省の遼寧、吉林、黒竜江省では、それぞれ解決策を見出すことに様々な努力が窺えた。例えば、吉林市は2010年に市民の健康及び持続可能な発展に悪影響を与える環境問題の解決に重きを置き、汚染物質排出削減事業を強化し、国の松花江水質改善戦略のより厳格な実行、松花江流域汚染防止計画の期間内完成、農村部及び都市部の安全な飲用水を保障、資源節約型社会、環境配慮型社会の推進を目的とする内容の環境保護事業方針を発表した。また、遼寧省では湿地保護区の整備は1985年から始まっており、近年では湿地パークの整備なども進められている。黒龍江省は、ロシアとの環境協力を強化するなど、このように急速な発展に伴う諸問題解決に対する努力がうかがえた。

本調査期間中には政府関係者との接点が多々あり、遼寧省の桓仁県発展の様子やそれに伴う環境問題とその対策などについて、詳細は本文にも触れているが、「これからの発展は環境を配慮する方向への転換が必要」との姿勢をみせていた。吉林省の長白山地区（国家級自然保護区）の森林公園や遼寧省の瀋陽植物園は、自然保護と観光資源開発が同時に進んでいる代表的な事例である。

### ③伝統文化・宗教施設復興を確かめる

現代に至るまでの中国は永い歴史の中で実に様々な文化を生み出してきた。本調査ではそのような中国における伝統文化・宗教施設を経済発展との関連を中心にみてまわった。

ここに見られるのは、いわば近代化あるいは経済成長による伝統文化（価値観）の復権という現象である、一般的には、経済成長と伝統的価値観は両

立しないものと考えられているが、実はそうではない。放置しておけば風化してしまう文化遺産を保護・保存していくことは国家や社会が豊かになってからこそ初めて出来ることなのである。

経済の発展によって町経済は潤い、住民の生活は豊かになった。上記で挙げた内容から、生活が豊かになれば、人々の教養も高まり、文化遺産の修復・復権にもその影響は及ぶことがわかる。無論、そのような経済発展効果がすべての文化遺産や宗教施設復権と直接結びつくとは言い難いが、経済発展が生み出す数多くの効果の中で、「文化遺産の強化」の一面として捉えることは出来よう。

さらにいえば、修復・復元によって文化遺産・宗教施設が伝統的な姿と完全に一致しているかといえば、実際のところそうでもない。修復過程において修復作業を急いだせいか、周囲の建築物との調和性に欠ける場合や年式相応の色ではなくなり、遺跡としての味が多少落ちた感じはあるが、経済発展に夢中になるあまり、開発地区内にあった貴重な文化価値のある遺物や施設をも容赦なく破壊してしまう<sup>7)</sup>よりは多少の変化があっても維持・保持したほうが意義のある行為であろう。

日本においても、伝統行事や祭りが昔の姿を完全に保持している事例は少ない。例として、香川県小豆島の全島規模で行われる太鼓祭りや土庄町のみで行われる夏祭りの場合、昔から続いている祭り、あるいは再現して今も続いている祭りとはいえ、祭りの中身は毎年変化が起きている<sup>8)</sup>。現在、共同体（コミュニティー）の中心である神社が地域住民の努力によって維持されているところは多々あるが、維持する方法は様々であるとされる。

最後に、上記に挙げた3省の経済発展ぶりはまさに光の速さのごとく、町の至る所で経済発展の様子がうかがえた。一見、関連性の薄いと思われる宗教施設の復興も経済発展とともに修復作業が行われている。たとえば、今年の北京オリンピック開催と合わせて長春にある故宮はオリンピック開催の3年前から復元作業が行われた。また、多くの施設（文化遺跡・文化公園など）は中国の文化財の最高価値をあらわす「A5級（AAAAA級と表記される）」を目指して拡張工事・整備を行っている。

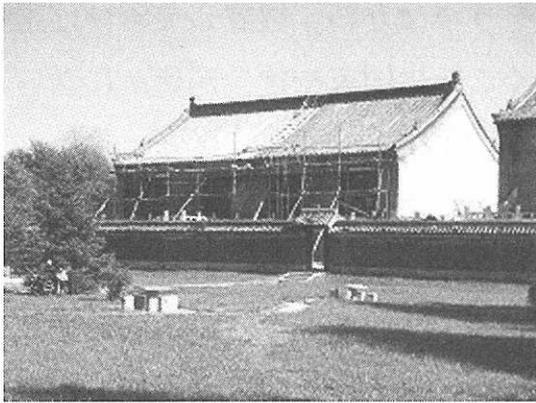


写真1 伝統文化施設復建作業の様子

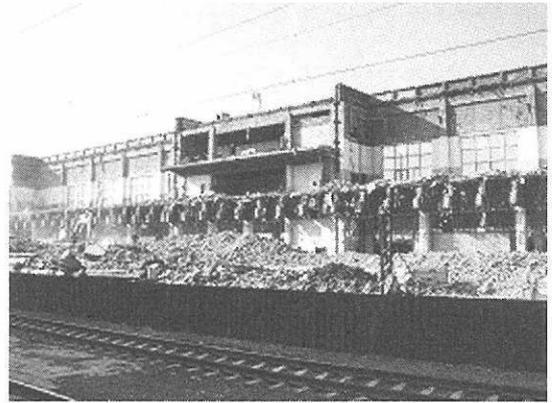


写真2 都市開発進行中の様子

中国全土における経済発展は今後も続くであろう。今回調査した3省は全体のほんの一部の例に過ぎない。経済発展がもたらす影響はかつて日本が経験したように、社会のあらゆるところに影響を及ぼす。世界に向けて輝かしい発展ぶりを見せつけ、すぐにでも経済大国となりそうな中国であるが——いずれそうなことは否めないしそうなってほしいと思うが——発展への高い関心と同時に、これから乗り越えなければならない課題——主に環境問題への取り組み・これまでとは違う国際人（教養のある国民）として価値観の形成等々——、ある意味本当の発展ともいえる課題も待ち構えていることを忘れてはいけないであろう。

このように、伝統文化は変容しながらも継続されていくのである。それは変質ではなく、むしろ創造的文化的行為といえるのではないだろうか。

今回の調査研究ではすでにある程度の経済発展を遂げている地域から過渡期であるところをも見ることができた。今後の課題としては過渡期である地域を対象に同じテーマをもって追跡調査を行いたい。

## 注

- 1) 本研究は、本学の高橋克秀教授（本学大学院特定課題「中国における社会経済の変動と伝統的価値観の復興に関する学際的研究」の研究代表者）との共同調査となった。特定課題研究は、経済発展に起因する格差による不平等感の高まりが中国社会に及ぼしている影響と、それに対応する政府の伝統的価値観の復興

権による民心の安定政策の有効性を分析することを目的として行われた。具体的には①経済格差に関する詳細なデータの入手に努める同時に、現地の大学・社会科学院などの協力を得て実態を把握する。②本研究の独自性は、これまで経済学の側面から議論されることが多かった中国の経済格差の問題をそれがもたらす社会的インパクトや国民の意識の変化、さらには政府の宗教政策の有効性まで視野を広げて総合的・学際的に分析するところにある。③中国の経済格差に関する経済学的研究は近年増加しているが、その心理的・社会的影響や政府による価値観の誘導にまで踏み込んだ研究はまだ行われていない。と3点に的をしぼった研究となっており、さらに本研究は、世界が注視する中国の経済的・社会的安定性を論じる際にきわめて有効な知見を生み出すものと期待されると考えている。

- 2) 中国共産党政権下における宗教政策は、①建国期の宗教政策、②文化革命期の宗教と政策、③改革開放後の宗教と政策に分けることができる。日本と中国の宗教法内容については省略し、本報告では、信教の自由に対する両国の差異について述べると次の通り。両国の法規を比較すると、共に個人の信教の自由は保障されているものの、中国側は、国家による宗教活動の認証範囲規定であり、日本は、政教分離の明示と宗教団体の法的能力に対する規定であると考えられる。つまり、中国における宗教に対する自由とは、あくまでも、個人の信教の自由を保障するものであり、宗教活動は政府の設ける認証範囲内でのみ認められていることが分かってくる。詳しくは関口泰由「中国共産党政権下における宗教」を参照。
- 3) 東北三省の概要については中華人民共和国国家統計局統計広報データ<http://www.stats.gov.cn/zxfb/>、外務省中国データ<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asia.html>、21世紀中国総研<http://www.21ccs.jp/>、感動大陸.com <http://www.kando-tairiku.com/> および中国まるごと百科事典<http://www.allchinainfo.com/>を参照
- 4) 長白山の頂上に広がるカルデラ湖である天池は満州を潤す松花江、中国と北朝鮮の国境である鴨緑江・豆満江の源流となっている。
- 5) 守政毅 立命館国際地域研究 第28号「中国東北三省における日中企業の戦略的提携の可能性」2008年12月、「東北地区振興計画」[http://chinaneast.xinhuanet.com/2007-08/20/content\\_10905015.htm](http://chinaneast.xinhuanet.com/2007-08/20/content_10905015.htm) (平成22年11月28日閲覧)
- 6) EICネット<http://www.eic.or.jp/news/?act=view&serial=16750&oversea=1> (平成22年11月28日閲覧)
- 7) 2010年9月15日、長い歴史を誇る中国だが、多くの文化財は文化大革命時の動乱によって破壊されてしまった。それを乗り越えた貴重な文化財が今、猛スピードで発展する不動産開発業者によって、再び消失の危険にさらされている。

この25年で少なくとも3万の文化財が消失したと言われる。香港紙サウスチャイナ・モーニング・ポストの報道を環球時報が伝えた。2002年に施行された文化財保護法は、文化財の破壊を回避するという面において、あまり良い効果が得られていない。多くの不動産開発業者は地元政府と癒着しているため、法律はさほど執行されていない。また、遺跡がある地域において、違法建築や文化財の損壊に対して最高50万元（約625万円）の罰金を科せられることになっているが、潤沢な資金を持っている不動産開発業者にとっては大した抑止力になっていない。

また、国際的に有名な遺跡でさえも、良い保護をされているとは言い切れない。地元政府は今、ユネスコの世界遺産登録に躍起になっている。しかし登録された遺跡の多くは、むしろ破壊されてしまうため、ある専門家はこの現状に警笛を鳴らしている。観光客が世界遺産に登録された遺跡に押し寄せるようになると、地元政府は“任務を果たした”とみなし、保護活動の手を緩めてしまう。こういった現状において、文化財を残していくのは非常に難しいだろう。（record china 記事より）

([http://www.excite.co.jp/News/chn\\_soc/20100918/Recordchina\\_20100918014.html](http://www.excite.co.jp/News/chn_soc/20100918/Recordchina_20100918014.html))

- 8) これに関して詳細は國學院大學神道研究収録24輯「社会構造変動と神社神道「過疎地域」の小豆島土庄町を事例に」を参照

### 引用文献・参考資料

- ・ 外務省中国データ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asia.html> 最終閲覧日 平成22年11月19日
- ・ 21世紀中国総研 <http://www.21ccs.jp/> 最終閲覧日 平成22年11月19日
- ・ 感動大陸.com <http://www.kando-tairiku.com/> 最終閲覧日 平成22年11月19日
- ・ 中国まるごと百科事典 <http://www.allchinainfo.com/> 最終閲覧日 平成22年11月19日
- ・ 『地球の歩き方』大連・瀋陽・ハルビン ダイヤモンド社 2010.8
- ・ 財団法人自治体国際化協会（北京事務所）「中国都市交通の現状と課題」2005
- ・ 関口泰由「中国共産党政権下における宗教」—宗教政策を中心として— 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 2004
- ・ 中国共産党吉林省委員会研究室〔編〕資料中国吉林省 1990.9
- ・ 中国北部のイスラーム建築 [http://www.ne.jp/asahi/arc/ind/6\\_china/northern/north.htm](http://www.ne.jp/asahi/arc/ind/6_china/northern/north.htm)
- ・ 第8回海外遺跡の旅の資料 [http://www.bell.jp/pancho/travel/china-2/aug30\\_](http://www.bell.jp/pancho/travel/china-2/aug30_)

eiryō.htm

- ・梶村昇「中国共産党の宗教政策をめぐって」中国研究：雲南を中心として〈共同研究〉亜細亜大学アジア研究所 1984